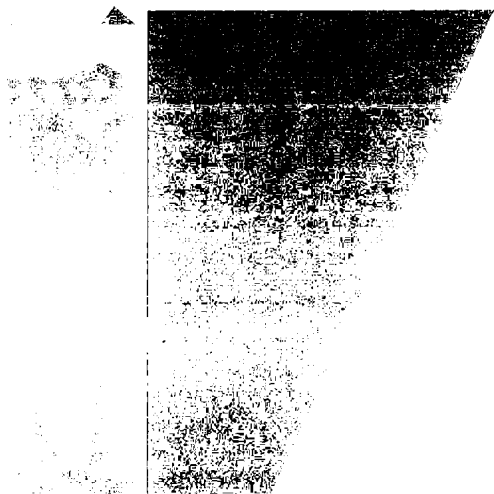


# 一瞬の夏

沢木耕太郎

下

新潮社



新潮社

いつ しゅん なつ  
一 瞬 の 夏  
— 下 —

発 行 昭和56年 7 月25日

2 刷 昭和56年 8 月15日

著 者 沢木耕太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

定価 1050 円

〒 162 東京都新宿区矢来町71

電話 業務部 (03) 266-5111

編集部 (03) 266-5411

振替 東京4-808

印刷所 株式会社金羊社

製本所 新宿加藤製本株式会社

© Kōtarō Sawaki, Printed in Japan 1981

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

下／目次

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| 第七章  | 回転扉   | 5   |
| 第八章  | 契約    | 49  |
| 第九章  | ソウルの雪 | 93  |
| 第十章  | 夢から夢へ | 155 |
| 第十一章 | 亀裂    | 193 |
| 第十二章 | 激しい雨  | 249 |

装幀／勝井三雄

一瞬の夏——下



## 第七章

### 回轉扉

半月が過ぎた。

明日から十一月に入るといふ日の午後、私は新宿の京王プラザホテルのロビーで内藤を待っていた。内藤に会うのは久し振りであった。試合の数日後に一度だけ顔を合わせる機会があったが、それ以来まったく会っていなかった。内藤が試合の疲れをとるため練習を休んでいたこともあるが、半月ちかくも会わなかった理由はそれだけではなかった。どうやら、私は自分でもはつきり意識しないまま、内藤から少し離れていようと思っていたらしいのだ。私がそのことに気がついたのは、FM東京という放送局からラジオへの出演を依頼された時だった。

ある日、以前から面識のある若いディレクターから電話がかかってきた。三十分ほどの番組に出て、何かスポーツに関する話をしてもらえないだろうかという。内容についてはいっさい自由だし、ひとりが話しづらければ誰でも好きな人を相手に選んでもらってかまわない。あまり気がすまず断わりうとしていた私は、誰を相手に喋ってもよいという条件に心を動かされた。カシアス内藤でもいいだろうか。私が訊ねると、むしろ望むところだ、とその若いディレクターは言った。内藤にきちんとした謝礼を払ってもらえるだろうかと言ねると、もちろんと答えた。私にはそれがどれほどの額なのか

はわからなかったが、たといくらでも、収入の途のない内藤には何らかの足しになると思った。しかし、承諾をし、電話を切ったあとで、そんなことをしていいのだろうかと不安になった。

その時、私は内藤と会うことをためらっているらしい自分に気がついた。会って話しているうちに、再び五年前と同じような情熱にとらえられることをどこかで危惧しているらしい自分に気がついたのだ。

五年前、私は内藤をこの手でもう一度だけ復活させたいという願望を抱いたことがあった。山の斜面を転げ落ちていくボクサーに手を差し伸べ、ふたたび山の頂へ押し上げようとする。そのような願望が、感傷的な若僧の、青臭い夢想にすぎないことはよくわかっていた。いや、わかっているくらいの冷静さは持っていると思っていた。しかし、それを現実化すべく人と人のあいだを駆けめぐっていた私は、熱に浮かされたも同然の状態だったに違いない。かつてこれほど熱中できたものは他になかった。だが、それが私にとってどれほど大きなものだったかは、内藤の逮捕という思いもかけぬ出来事によって挫折するまでわからなかった。すべての努力が空しいものとなったことを知った時、不意に自分の内部がからっぽになってしまったような空虚さを覚えた。まだ五体に残っているかのようなその深い喪失感の記憶が、私に五年前と同じような願望を抱くことを恐れさせていたのかもしれない。自分で言い出しておきながら、私はラジオで内藤と対談することが重荷になりはじめた。しかし、約束をしてしまった以上、逃げるわけにはいかなかった。内藤に連絡をとると、面白そうだからやりたいという。私たちは収録に指定された日時の三十分前に京王プラザホテルのロビーで待ち合わせることにした。

内藤は約束の時間に二十分遅れてようやく姿を現わした。ガラスの回転扉から入ってくる内藤を、ロビーのソファに坐って眺めていた私は、その太り具合に少し驚かされた。

「太ったな」

それが挨拶のかわりだった。

「太った。喰って寝て、喰って寝て、その繰り返しだからね」

内藤が苦笑しながら言った。どうしても太れない、と嘆いていた一カ月前が嘘のような肉づきのよさだった。

「練習は？」

「昨日から始めたんだ」

「ということは、二週間以上も休んだことになるのかな」

私が言うと、内藤は頷きながら小さな声で呟いた。

「まだ……次の試合が決まらないしね」

「そうか……」

それは困ったな、と続けようとして、危険な匂いのする話題になっていきそうなので、私は内藤を促しホテルを出た。

放送局のスタジオはそのすぐ並びの高層ビルの最上階にあった。

エレベーターで昇ると、全面がガラス張りの休憩所に案内された。眼下には東京の風景がいっぱい広がっている。そこでディレクターを待っているあいだ、内藤はガラスに額をつけ、幼児のような熱心さでその風景を眺めていた。綺麗だなあ、すごいなあ、と内藤は何度も素朴な嘆声を発した。私も、意外に緑の多い東京の街に眼をやりながら、そのたびに相槌を打った。

ディレクターが来て、すぐに私たちはスタジオに入った。私たちが喋ったものを録音し、あとで十分に編集するという。だから、時間を気にせず好きなようにやってほしい。ディレクターにそう言って励まされたものの、マイクをはさんで向かい合うと、何をどう話していいかさっぱりわからなかった。考えてみると、私たちがこのようにあらたまって話すなどというのは初めてのことだったのだ。

しかし、サウスポーに関する談義をきっかけに話を進めていくうちに、私たちは次第に熱中するようになり、気がついた時には一時間半を超えていた。疲れがとれ、気力も体力も充実しているせいか、内藤はいつも以上に饒舌だった。内藤の少年時代、ボクシングの技術論、内外のボクサー評、と話は多岐にわたったが、最後はやはりこの前の大戸戦にいきついた。

私が感想を述べようとすると、内藤がいくらか弁解じみた口調で言った。

「終ってから、みんなにどうしてもっと打たないんだと言われたけど、俺、やっぱり怖かったと思うんだね。怖かった。でも、それは半分。残りの半分は、やはりどんなことをしても勝ちたかったんだ。判定でも何でもいいから勝ちたかった。勝つことが一番だったから、試合ぶりなんか気にしていられなかったんだ」

「それにしても、手数は少なすぎたかもしれないな」

私が言うと、内藤は不満そうな表情を浮かべた。

「でも……」

「いや、俺は批難しているわけじゃないんだよ。四年半ぶりの試合にしては本当によくやったと思う。だけど、パンチが出なかったのは確かじゃないか」

「うん……」

「問題は、それが再起第一戦だったからなのか、それとも知らない間に身についてしまったものなのかということさ」

内藤はしばらく黙り込み、それから堰を切ったように喋りはじめた。

「それは心配ないと思うよ。うん、まったく心配ない。あの試合は確かにパンチが少なかった。でも、それは仕方がないと思うんだ。俺、第一ラウンドは見たよね。それは誰でもすることだからいい。でも、第二ラウンドも第三ラウンドも俺は見えていった。だって、一発で引っ繰り返されたらそれで終り

じゃないか。試合が終るだけじゃなくて、ボクサーとしての俺が終っちゃうかもしれないじゃない。だから見た。四ラウンド目になって、ようやくやれそうだなと思ったんだ。大戸のパンチはよけられそうだなって。でも、そうしたら五ラウンドでカタがついちゃった。打つ場面が少なかったのは仕方ないよ。今度やる時は大丈夫さ、最初からガンガンいくよ」

「それならいいんだ」

しかし、内藤の言葉を額面通りに受け取るわけにはいかなかった。彼が真に闘争的なファイターになりえているのかどうかはまだわからなかった。

「大戸が相手じゃ役不足だったと思うかい？」

私が訊ねると、内藤は即座に首を振った。

「そんなことはない」

「観客の中にはそう思った人がかなりいたようだったけどね」

「そんなことはないよ。……大戸のパンチはやっぱりすごかったしね。ほら、俺、二回に打たれたじゃない。効いたなあ、あのパンチ。体中がしびれて、どうしようもなかったからね」

私はつい最近放送されたNHKのテレビを思い出した。若者向け番組のひとつのコーナーで、内藤の簡単な人物紹介風のフィルムが流されたのだ。試合直前のインタヴューを軸に、試合の様子などを織りまぜながら構成されていたが、その中に内藤が棒立ちになっているところをはっきりととらえているフィルムがあった。一瞬のためほとんどの人は見すごしてしまったに違いないが、大戸のパンチによって体がいうことをきかなくなってしまったらしいことは、気をつけて見ているとよくわかった。「危なかったな、本当に」

私が言うと、これがラジオのための会話だということを忘れて、内藤は妙に生々しい声を上げた。「ヤバかったよ、ほんとヤバかった」

「ヤバかった、か」

私は笑いながら言った。

「うん、ヤバかった。エディさんもあとで言ってたよ。すごいパンチを持ってるって。大戸もこっちに出てきてみっちりトレーニングを積めば、ほんとにいいヘビー級になれるって言ってた」

「そう」

「とっても、惜しいって」

「そう……」

私は軽く受け流しながら、内藤の言葉の奥に、彼自身も気づいていない勝者の驕りのようなものが潜んでいるのを、微かに感じていた。内藤が大戸を救い上げようとしているのは、自分が勝った相手のできるだけ巨大な存在に見せようという、闘う者のエゴイズムによっていた。

大戸はこれからどうするのだろうか。これから先もボクシングを続けていかなくはならないのだろうか。そして、それは果していつまで続くものなのだろうか。そのような思いが浮かび、消えた瞬間、私は内藤に対して少し意地の悪い質問を試してみたくなった。

「あの試合はあれでよかったと思う」

私が言うと、内藤は小さく頷いた。

「しかし、素晴らしくいい試合というのでもなかった」

私が言葉を重ねると、内藤はまた頷いたが、何を言い出すのかと、不安そうな表情になった。私は一呼吸おいてからいくらか強い口調で訊ねた。

「今までに、本当にいい試合というのを、したことがあるかい？」

「……………」

「大戸は、そういういい試合ができたならボクシングをやめてもいいと言っていたけど、君にはそうい

う試合の経験がある？」

しばらく考えていた内藤は、かすめるような声で答えた。

「ない……ね」

私は内藤が大戸のはるか上に立ったような物言いをするのが気に入らなかったのだ。たとえば金沢和良における対オリバレス戦のような、これがあるから自分のボクシング人生は充実していたと言い切れる、絶対的な試合を持ったことがないという意味においては、お前さんも大口と少しも変わるところがない。私は内藤にそう言いたかったのだと思う。しかし、内藤の寂しそうな表情を見ているうちに、余計なことだったかもしれないと後悔しはじめた。少なくとも、このような公的な場所で話すべきことではなかった。私は話題を換えようと口を開きかけた。ところが、内藤がいつにない真面目な口調で先に喋り出した。

「俺には、ないね、そういうのは。でも……だから……作りたいね。この試合があったからオーケーというような、そういうのを作りたいね」

「そう思う？」

「思うね。そういうのが欲しいよ。作りたいよ」

静かだが熱っぽかった。私は内藤のその真剣さに巻き込まれ、思わず一緒にそれを作ろうかと言いつつになり、辛うじてその言葉を呑み込んだ。自分が挑発した会話に自分が乗ってしまいそうになった。私は今度こそ本当に話題を換えた。

## 2

放送局を出た時には、あたりのビルの灯が明るく映えるほどになっていた。二時間余りも話しづ

めだったせいとか、軽い疲労と顔の火照りを覚えていた。どちらからともなくひと休みしていいということになり、再び京王プラザホテルに入ってしまった。そして、和服姿の女性が給仕をしている静かな喫茶室に腰を落ちつけた。

テーブルの上の小さな赤いランプには、すでに灯がともされている。コーヒーを注文しおわると、内藤はいきなり喋りはじめた。

「それにしても、エディさんて、大変な人だよね」

「……………」

「試合の日、控室でバンデージ巻こうとしたら、俺の手が濡れてたんだよね。昂奮してたせいもあるし、まわりでチャホヤされていたこともあるんだけどね。そうしたら、エディさんがこんな手じゃ巻けないよって怒ったんだ」

「そういえば、そんなことがあったような気がする。バンデージを巻く前には必ず絆創膏で下地を作るが、汗をかいているとうまくつかないのだ。しかし、それがどうしたというのか。」

「それで？」

「私は先を促した。」

「エディさんに怒鳴られて、ビクッとしたんだ。俺、誰に怒鳴られても平気だけど、今エディさんに怒られることだけが怖いんだ。そうしたら、ピタッと止まったんだよね、汗が。汗なんて拭いても拭いても止まるもんじゃないのに、そのひとことで止まっちゃった。すごいと思ったね。エディさんて、ああいう場合になると、人を呑む迫力があるんだね」

内藤の再起には、やはりエディが不可欠の存在だった、ということなのだろう。

「エディさんといえば、例のマネージャーの件はどうなった？」

私は思い出して訊ねた。試合の直前に激励賞に関してゴタゴタがあった。ゴタゴタ自体はどうでも

よかったが、マネージャーがエディに替っていないというのが気になった。試合の数日後、会った際にその話をする、内藤はびっくりしたらしく、会長と話をつけると息まいていた。その結果を知りたかったのだ。

「話はついた？」

「うん、大丈夫だった。今度こそ、本当にエディさんがマネージャーさ。会長、俺たちにはオーケーと言っておきながら、ジムのみんなには言ってなかったんだ。でも、今度はきちんと話しておくて」

「それはよかった」

そう言いながら、しかし、マネージメントに関するゴタゴタが、これですっかりなくなるとは信じられなかった。私は訊ねた。

「そうすると、次の相手はエディさんが探してくれているわけだな」

「うん。……でも、まだ見つからないみたいなんだ。どうしてだろう」

「ミドル級はあまりボクサーがいないからな」

「早くやりたいんだよね」

頼りなげに呟いた。エディはトレーナーとしては超一流の腕を持っている。しかし、マネージャーとしての手腕には疑問があった。どこかのジムの手頃なボクサーを見つけてきて試合を組む。そのようなことをするには、エディの日本語はあまりにもたどしきだったし、また情報も不足していた。

試合の数日前、内藤の練習を見ながら、金子がエディに忠告したことがあった。大戸との試合に勝ってからは試合は作りにくい。今のうちに口約束でいいから次の相手と契約しておいたほうがいい。エディは、そうね、そうね、と頷きながら、しかし実際はどうにも手を下せないでいるようだった。

金子は具体的なひとりの名をあげ、そのジムに電話するようすすめていたが、エディはそのボクサー